

神 殿 講 話

澤 田 忠 和 理 事



神殿講話全文

先ず今年を振り返ってみますと、年頭より新しい活動方針に添って歩んで参りました。「教典を日々の生活に生かし、教祖伝をひながたをたどる拠り所として歩もう」、「ひながたとは、ようぼくを育て増やすこと」で、中席者280名の丹精でございます。

毎日朝づとめの後、教典を拝読させて頂き、一日の生活の中に生かせるよう、つとめさせて頂いておりましたが、6月に入りまして思いがけない真柱様のご身上という大きな節をお見せ頂きました。昨年の7月、かんろだいが倒されるといふ節と合わせる大きな節でございます。親神様よりの多大なるお仕込みである事は間違いないと受け取らせて頂いております。当初の頃は私の職務・役目柄、それぞれの教会から「今月おさづけの理の拝戴はありますか。」

問われることがあります。私は、「わかりません。」と言うと、「いつ頃になりますかね。」と聞かれます。「全くわかりません。」と返答するしかありません。そうした中、月日が経つてきて、真柱様のご様子も少しずつ耳に入るようになってきました。秋の大祭の時の内統領先生のお話を聞かせて頂き、「快方に向かつておられます。」とのお話を聞き、「あ、よかったです。」と思っている現在であります。話は戻りますが、真柱様ご身上とお聞きしました時から朝・夕のおつとめ、また毎日の9時のお願いづとめには、1日も早くご回復頂きます様お祈りすると共に、どんな神様のお仕込みなのだろうと考えておりました。そうしているうちに、去る10月の大教会長様の神殿講話のお話の中で、この道の立教の話から、我々人間はどうしたら陽気ぐらしへ向かって行けるのかわかりやすくお話下され、最後におつとめの大切さをお話し下さいました。

「教祖が二十五年の定命を縮めてまで急ぎ込まれたおつとめを毎月真剣につとめましょう。そして、つとめの網走と言われた時代もあったという事を思い返して。」と言われてきましたが、全くその通りであります。当時、毎月13日のねりあい会、今現在は連絡会議ですが冒頭に昨日の月次祭の反省が行われるのであります。皆真剣でありました。一人一人自己申告するのです。「私は上半くだりのておどり当てて頂きましたけれども、下りの幾つを間違ってしまった。」と、「鳴り物、すみません、この重ね打ちを間違えました。」とか、全て自己申告して間違った方はお詫びをする訳であります。ですから13日に欠席をする人は、ほとんどおりませんでした。

話は本題に戻りますが、おつとめの話と同じく、おさづけの理も同じだと思っております。私なりの解釈ではありますが、おさづけの理は教祖のお命を頂戴しているのだと思うのであります。別席を運び満席になり願ひ出によりおさづけの理を拝戴するのであります。当たり前前様の頂戴していたおさづけの理を、今現在は頂けないのであります。6月以降ようぼくの方は一人も誕生していません。今今おさづけを頂戴しているようぼくである私達一人一人がおさづけの理の取次をもっとも病む人にお取り次ぎをしなければならぬ、ということをお思ふのであります。現ようぼくは、おたすけに励まなければならぬ、という親神様のお仕込みだと感じるのではありません。

また10月25日、詰所での特別講話の時、撫養の前会長様であります。土佐先生のお話も、おつとめの大切さ、中でも神様の御守護のお話を分かりやすくお教え下さいました。先生は全教的に親神様の御守護のありがたさを知らない会長はじめ、信者さんが多い事を指摘され、きちんとわかる様、親が子どもに伝えていない場合が多い。それではお道が伸びて行きようが無いんだとお話下され、きちんと伝える事を怠っているから何となく本筋が見えてこないし、有難さも分かっていない様で分かってないんだとお話下されました。

また真柱様の理についてもお話下されましたが、翌日の秋の大祭でも内統領先生の神殿講話のお話で、おさしづを用いて、内統領先生も全く同じ話をされておりました。内は、大変驚いております。内統先生のお話は、ひながたの台となられた教祖のご家族、特にこかん様のお話を通して、神一条の通り方をお話下されました。私はこかん様の事はあまり詳しく知りませんでしたので、聞かせて頂き、又、「みちのとも」を何度も読ませて頂くと、当時の時代の様子が頭に浮かんできて胸が一杯になりました。皆さんも聞かれたいかと思いますが、是非「みちのとも12月号」をお読み頂きたいと思っております。

またひとつには、お話の中で、親の心配を一つ担わせて頂くというお話もされておりました。おちばで勤務者として勤められていた青年さんが長年の身上を持っておいでになりました。ある時骨折をされて入院し、先生の所に挨拶に来た時に、「おちばはありがたいです。憩いの家も近いし休みも頂けます。」と言う返事だったので、「1度自分の教会に帰って、お父さんが心配している事を何か尋ねておいで。」と言ってあげたそうです。その方が帰りまして先生の所へ行つて、「父は部内に会長のいない教会があるので、それが心配だと言っていました。」

そうすると、「どう思う？」とお聞きになったそうです。そうしましたらその青年さんは、「父が心配している教会の會長をつとめたいと思えます。」